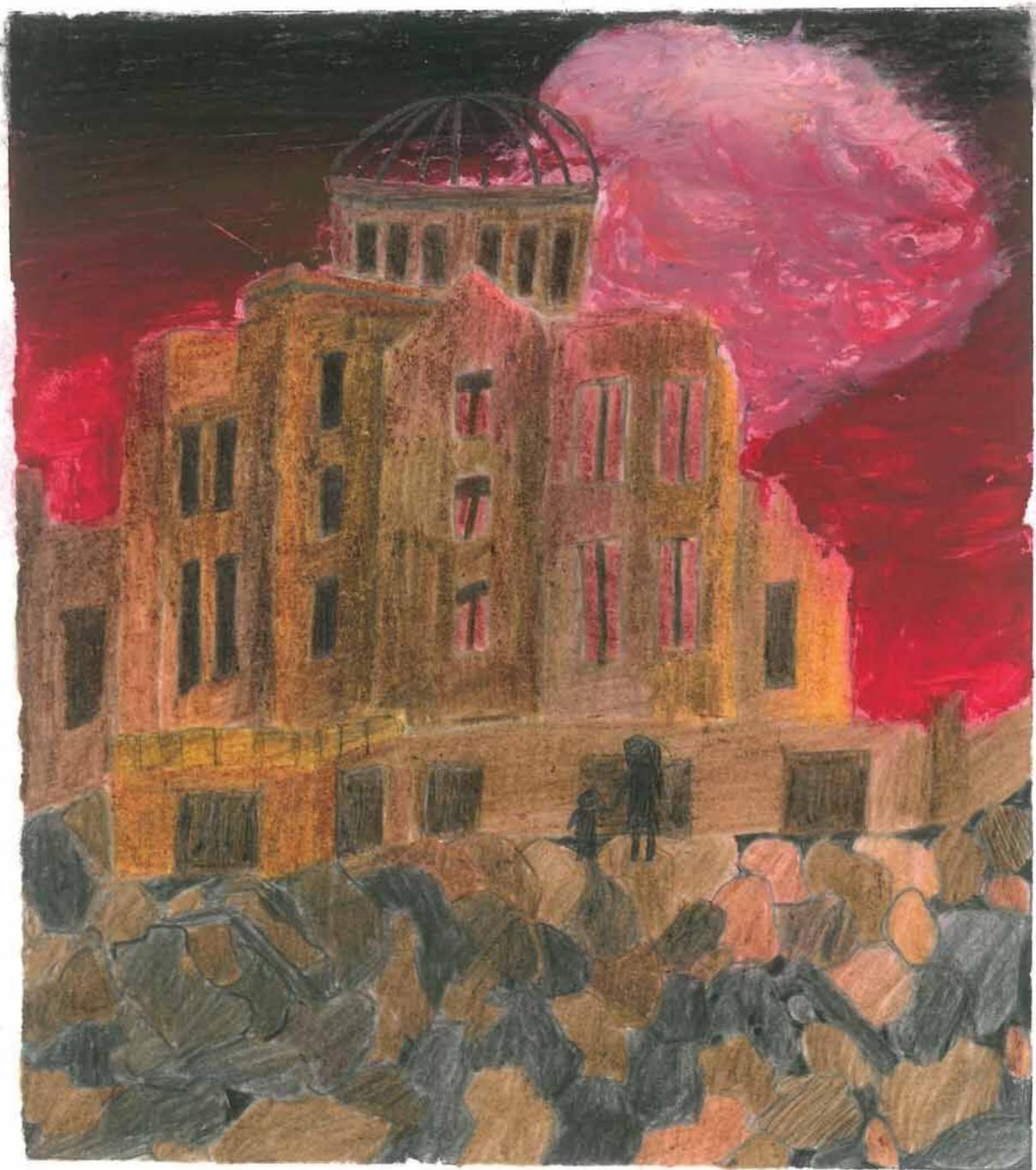


思いをつなぐ

～忘れてはいけない、あの日のこと～



制作にあたって

1945年8月6日広島に、そして8月9日長崎に、原爆が放たれました。大量の放射線と強烈な爆風、熱線によりどちらの街も一瞬にして破壊され、罪なき多くの市民の尊い命が奪われました。

あれから80年が経過しました。

世界には、依然として12,000発以上の核兵器が現存し、さらには、核兵器を脅しに使用する侵略戦争が起きるなど、核兵器の使用がこれまでになく現実味を帯び、その脅威は再び我々人類にのしかかっています。

このような情勢にあっては、唯一の被爆国である我が国は世界の国々と一体となって、より一層核兵器の廃絶に取り組んでいく必要があります。

この「時をつなぐ平和絵本」は、原爆によって被害を受けた人の高齢化が進むなか、その体験を風化させることなく後世に語り継ぐため、市内中学生のみなさんが、被爆された方の体験を聞き、絵本にする取り組みで、制作を通して被爆の実相を知るとともに被爆者の平和への思いを受け継ぎ、伝え、広げていくことを目的としています。

この絵本を通して、被爆者と子どもたちの平和への切なる願いが、一人でも多くの人に届くことを期待しています。

結びに、自らの被爆体験をお話いただいた堺原爆被害者の会藤野守様、並びに今回の制作にご協力をいただきました富田林市立第二中学校平和の絵本実行委員会のみなさん、そしてご指導いただいた先生方に心から厚くお礼を申し上げます。

令和8年3月

富田林市



広島での被爆体験を語られる藤野さん

令和7年7月16日、富田林市立第二中学校において、堺原爆被害者の会から ふじの藤野 まもる守さんをお招きし、広島での被爆体験を語っていただきました。

藤野さんは広島爆心地から3km以内の学校の寄宿舍で被爆されました。被爆の経験はご家族にも話してこられませんでした。被爆から60年目に母校の慰霊祭に参列されたことをきっかけに、折に触れ人前で話をされるようになりました。「これは生き残った自分が伝えていかなければならない」と。

終わりに藤野さんは「原爆について、世間一般の人は、どの程度知っておられるでしょうか。年配の人が亡くなってくると、こういうことがあったことも消えてなくなるというか。こういう歴史を絶やさないように、皆さんが伝えてくださることを願っています。」と思いを述べられました。



戦^{せん}後^ご80年^{ねん}が経^たちました。

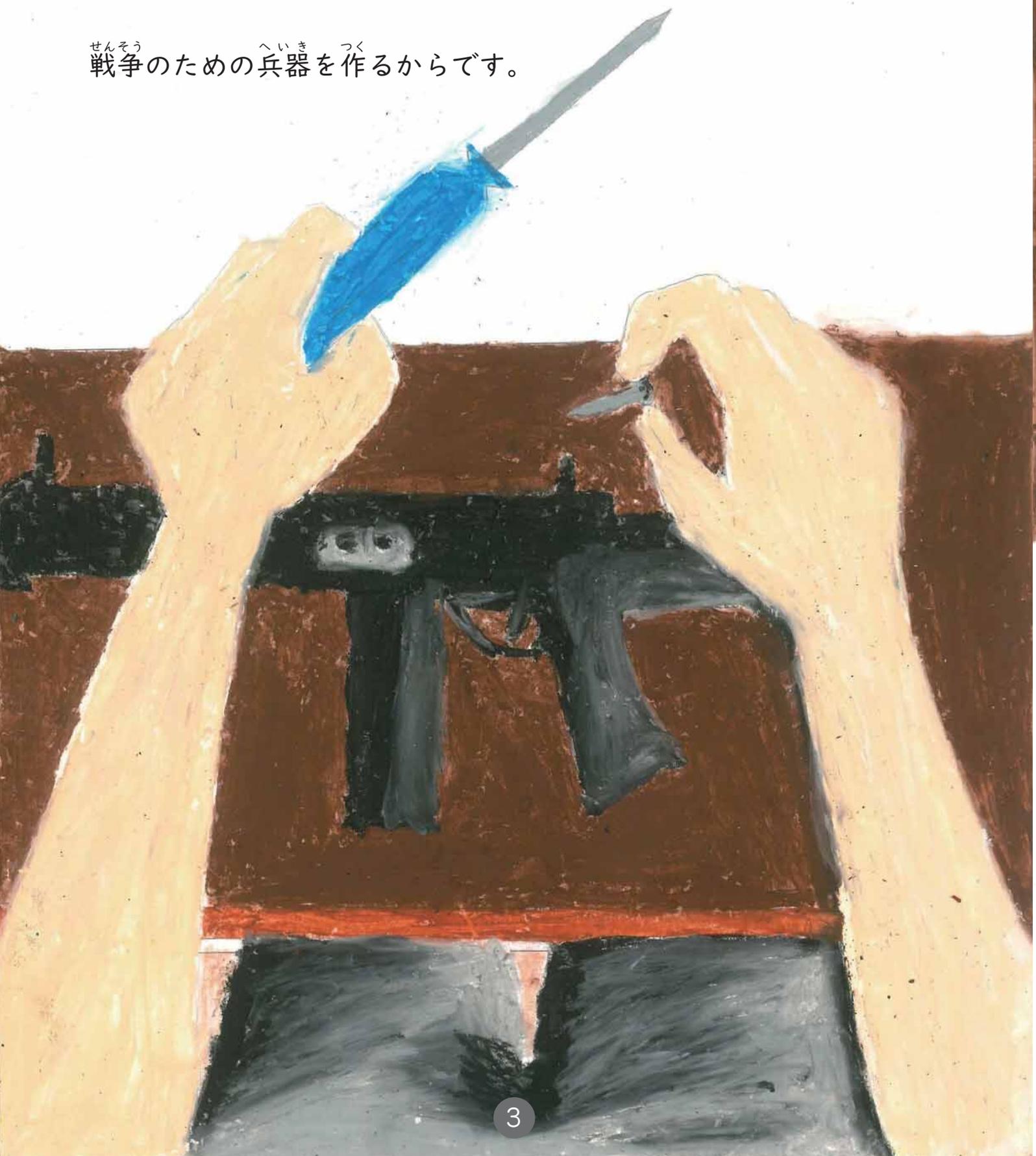
それでも、あの日^ひを忘^{わす}れることはできません。

わたし どうじ きゅうせいちゅうがく よねんせい
私は当時旧制中学四年生でした。

げんざい こうこういちねんせい
現在でいう高校一年生です。

がっこう かよ
でも学校には通っていませんでした。

せんそう へいき つく
戦争のための兵器を作るからです。



やきん しごと お しない がっこう きしゆくしゃ やす
夜勤の仕事を終えて、市内の学校にある寄宿舍で休んでいた

しょうわ ねん (1945年) がつむいかごぜん じ ふん
昭和20年(1945年)8月6日午前8時15分。

ひこうき ばくおん き ひかり はし しょうじ あ しゅんかん
飛行機の爆音が聞こえ、パッと光が走った障子を開けた瞬間



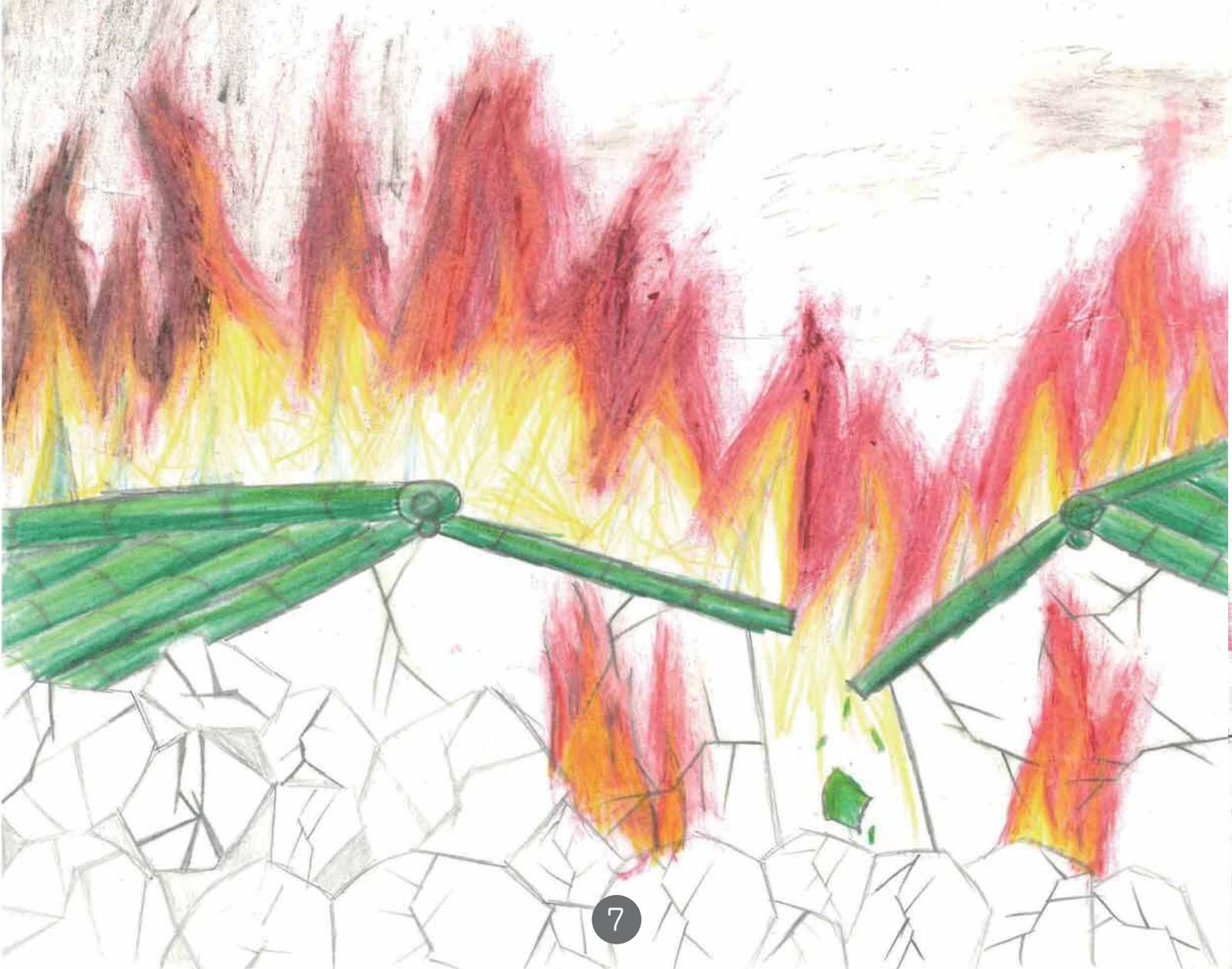


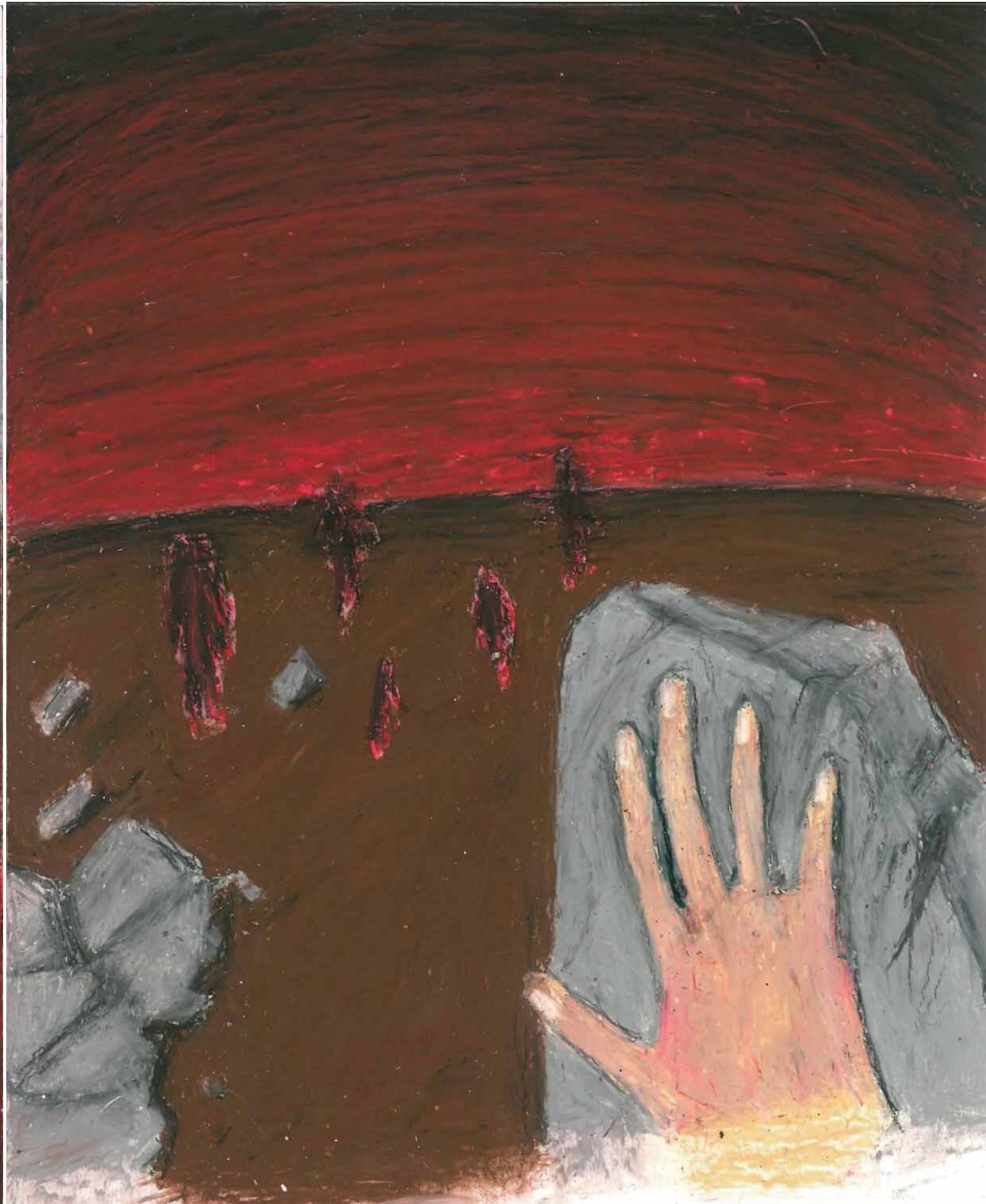


「はっ、、、」

気がつく^きと私^{わたし}は下敷^{したじ}きになっていました。

落ち^おたんです。壁^{かべ}も、瓦^{かわら}も、天井^{てんじょう}も





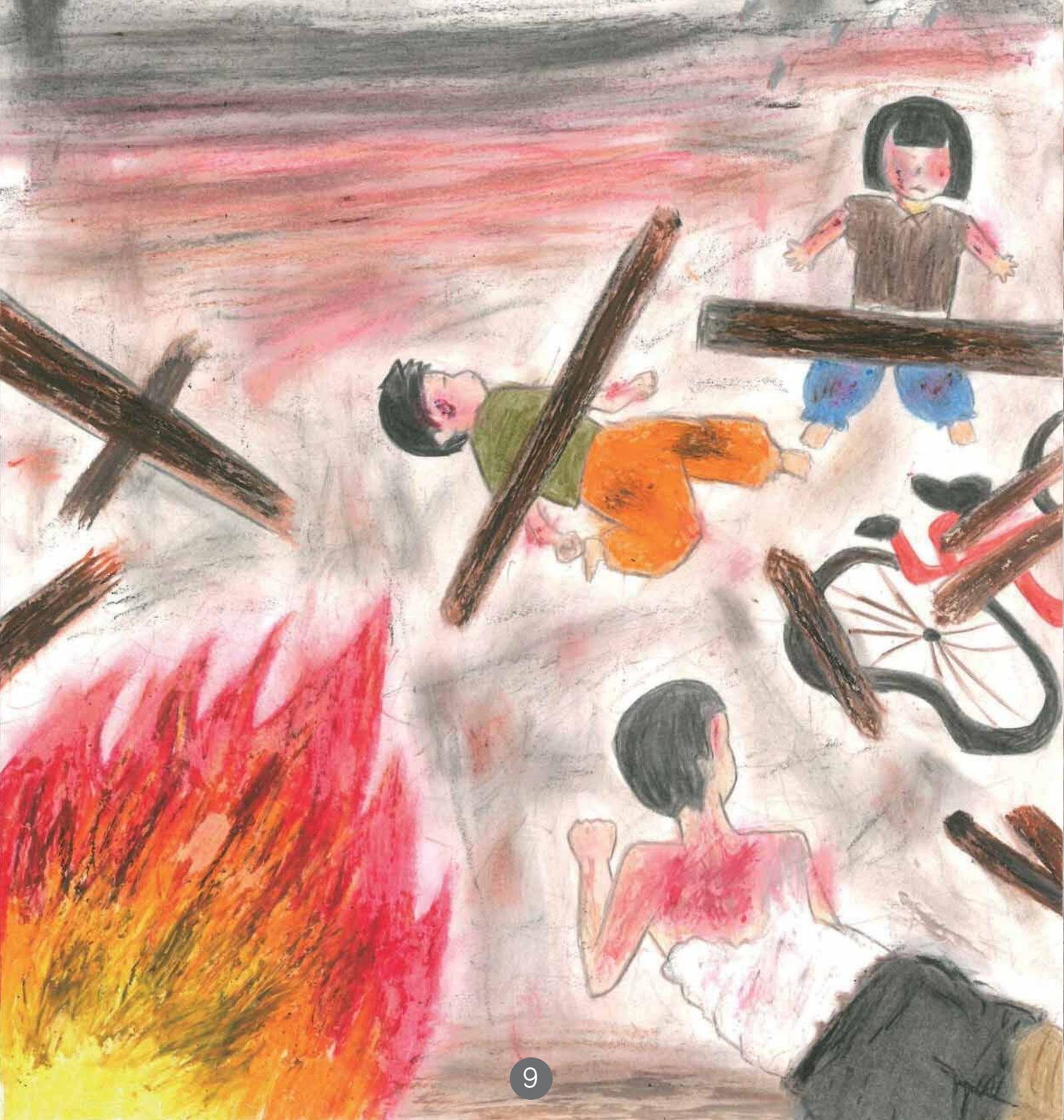
わたくし ^{ひっし} 必死にがれきから ^は 這い出して ^{そと} 外の景色を ^み 見ると、

^{あかぐろ} 赤黒い空と ^ま 真っ赤な ^{ひとびと} 人々で ^{あふ} 溢れていました。

いふくは^や焼け^おち^ほお^うて^ひの^ひふ^が
衣服は焼け落ち頬や腕の皮膚が

は^はが^たれて^さ下^がり、
剥がれて垂れ下がり、

その^ある^すが^た姿^はま^じる^じで^ごく^えす^ず
その歩く姿はまるで地獄絵図でした。



なか 一番 やけど お 二ねんせい おとこ こ
中でも一番ひどい火傷を負ったのが二年生の男の子でした。

かお は
顔がどんどん腫れてきて、

め み 見え ない くらい 大き く 腫れ 上 が っ て い ま し た 。



おとこ　こ　みず　みず
男の子は「水くれえ、、水くれえ、、」

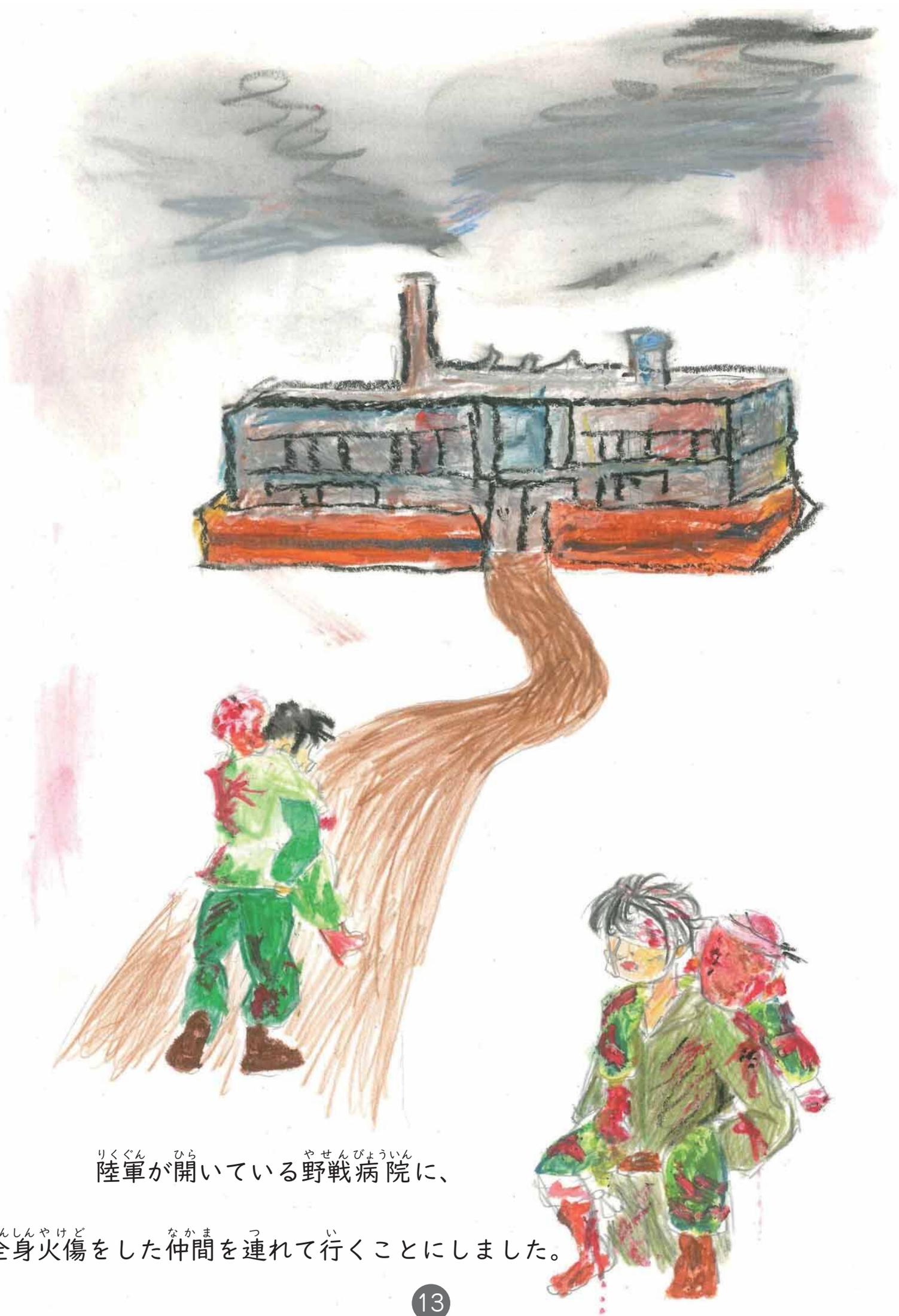
と泣いていました。



でも^{のど}喉に^{やけど}火傷を^お負っていたので、

^{みず}水を^{すこ}少しずつしかあげられませんでした。

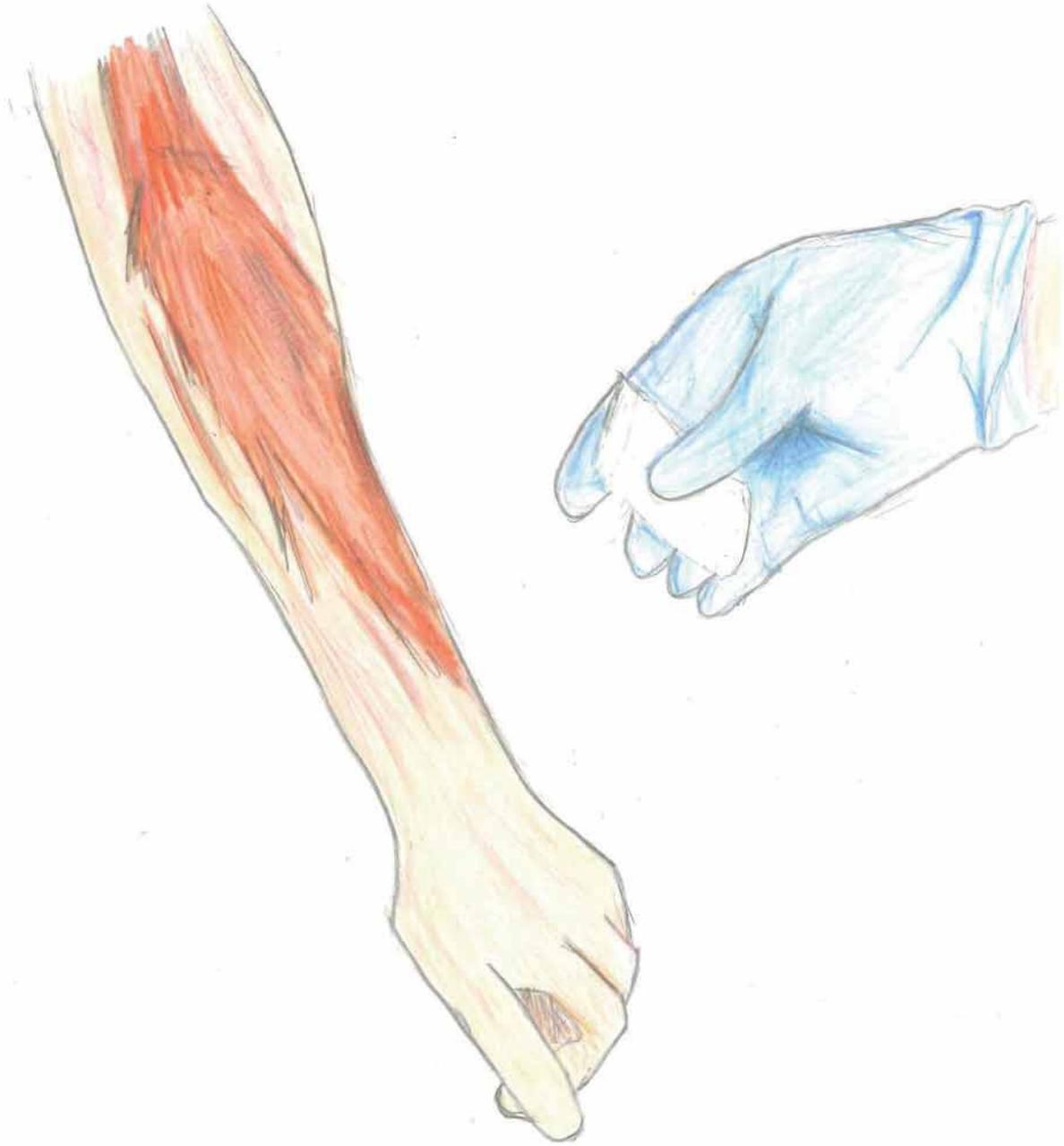


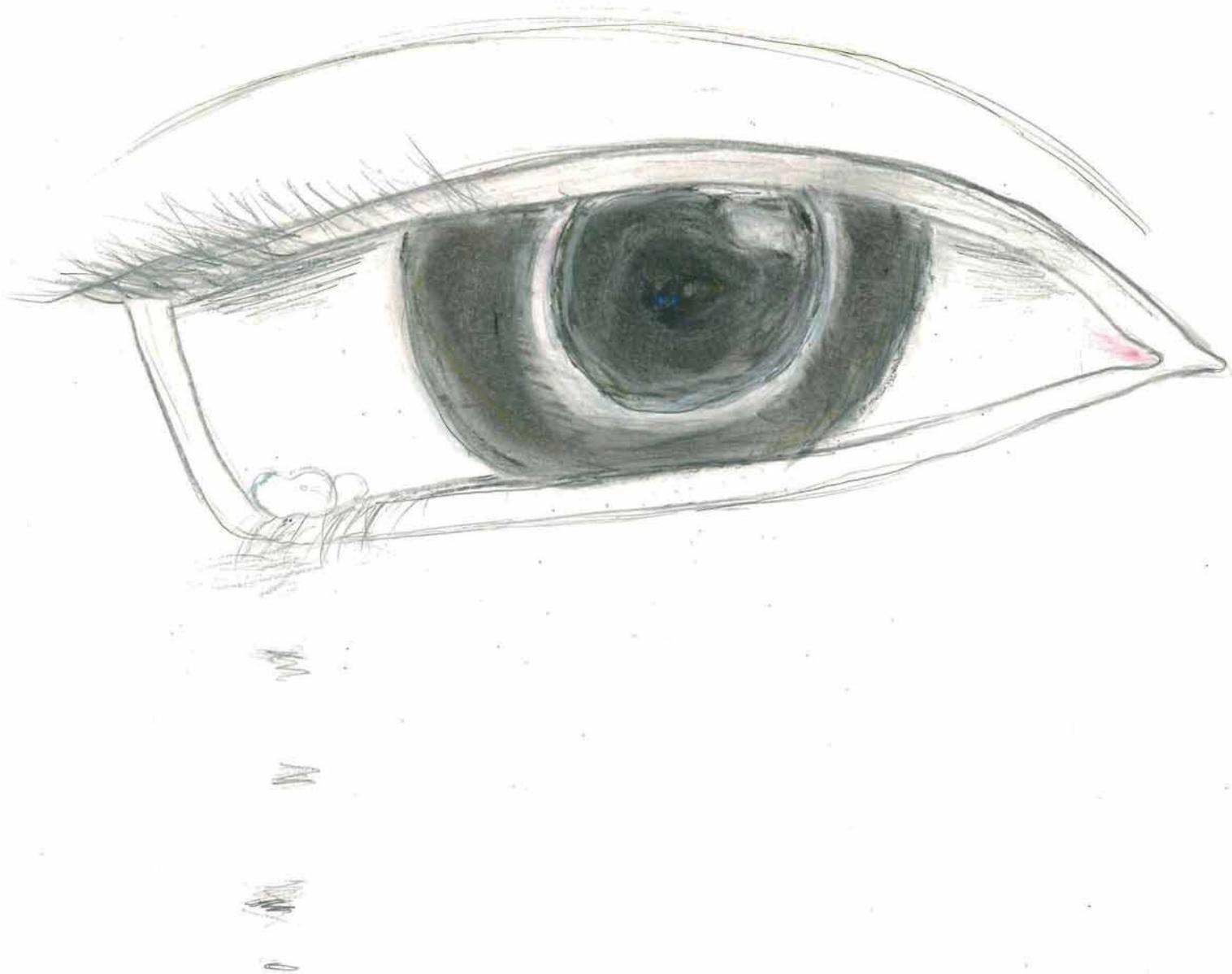


りくぐん ひら やせんびょういん
陸軍が開いている野戦病院に、

ぜんしんやけど なかまをついでいくことにしました。
全身火傷をした仲間を連れて行くことにしました。

そこには、^{おおぜい}大勢の^{けが}怪我や^{やけど}火傷をした^{ひと}人がいて、
^{ていねい}丁寧に^{ちりょう}治療をできる^{かんきょう}環境ではありませんでした。





そして、

わたしは今でも鮮明に覚えている光景があります。

わか かあ ぜんしん おおやけど いき た だ
若いお母さんは全身を大火傷し、息も絶え絶えでした。

むね あか
その胸に赤ちゃんがしがみついて

いっしょうけんめいちち さが
一生懸命乳を探していたのです。

は こ い なが
果たしてあの子は生き永らえたであろうか。

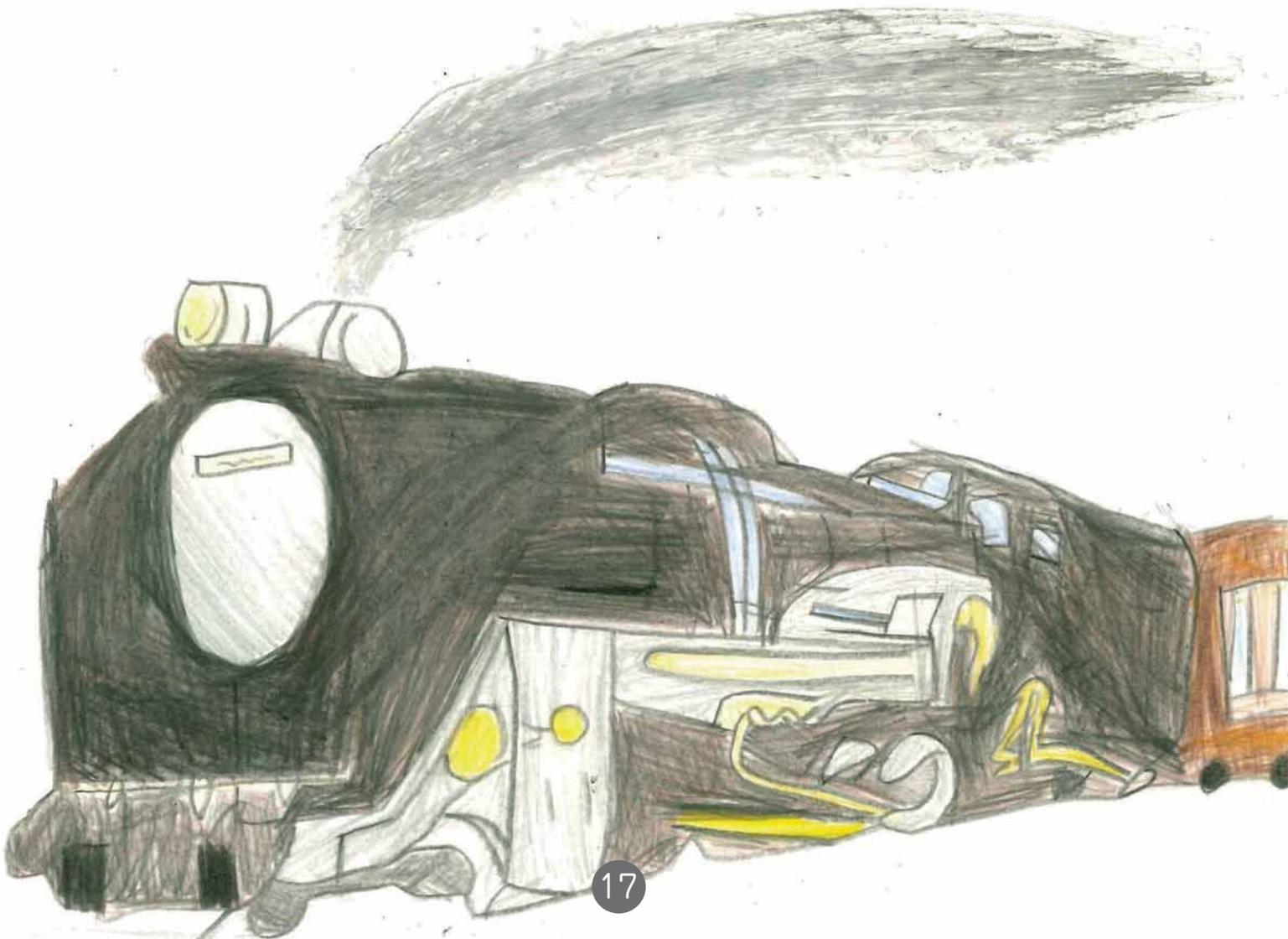
いま おも だ むね つ
今でも思い出すたびに、胸が詰まります。



きしゆくしゃ のこ 残っていたのは私^{わたし}ともう一人^{ひとり}になりました。

いえ かえ 帰ろうと私^{わたし}たちは駅^{えき}まで歩^{ある}いて行^いきました。

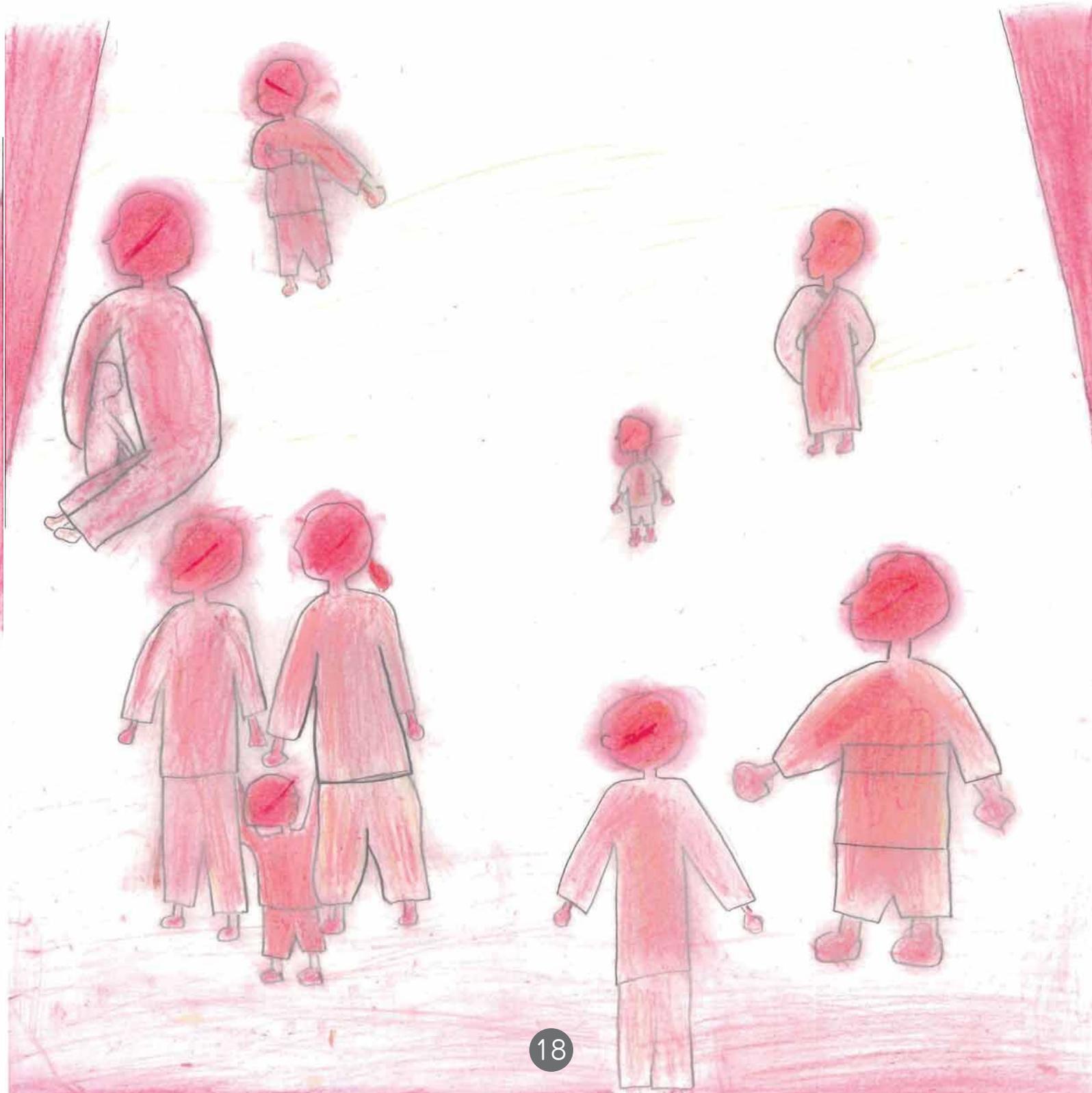
なんとか汽車^{きしや}は動^{うご}いていたのです。



その道^{どうちゆう}中で大怪我^{おおけが}をした人^{ひと}がずらりと並^{なら}んでいました。

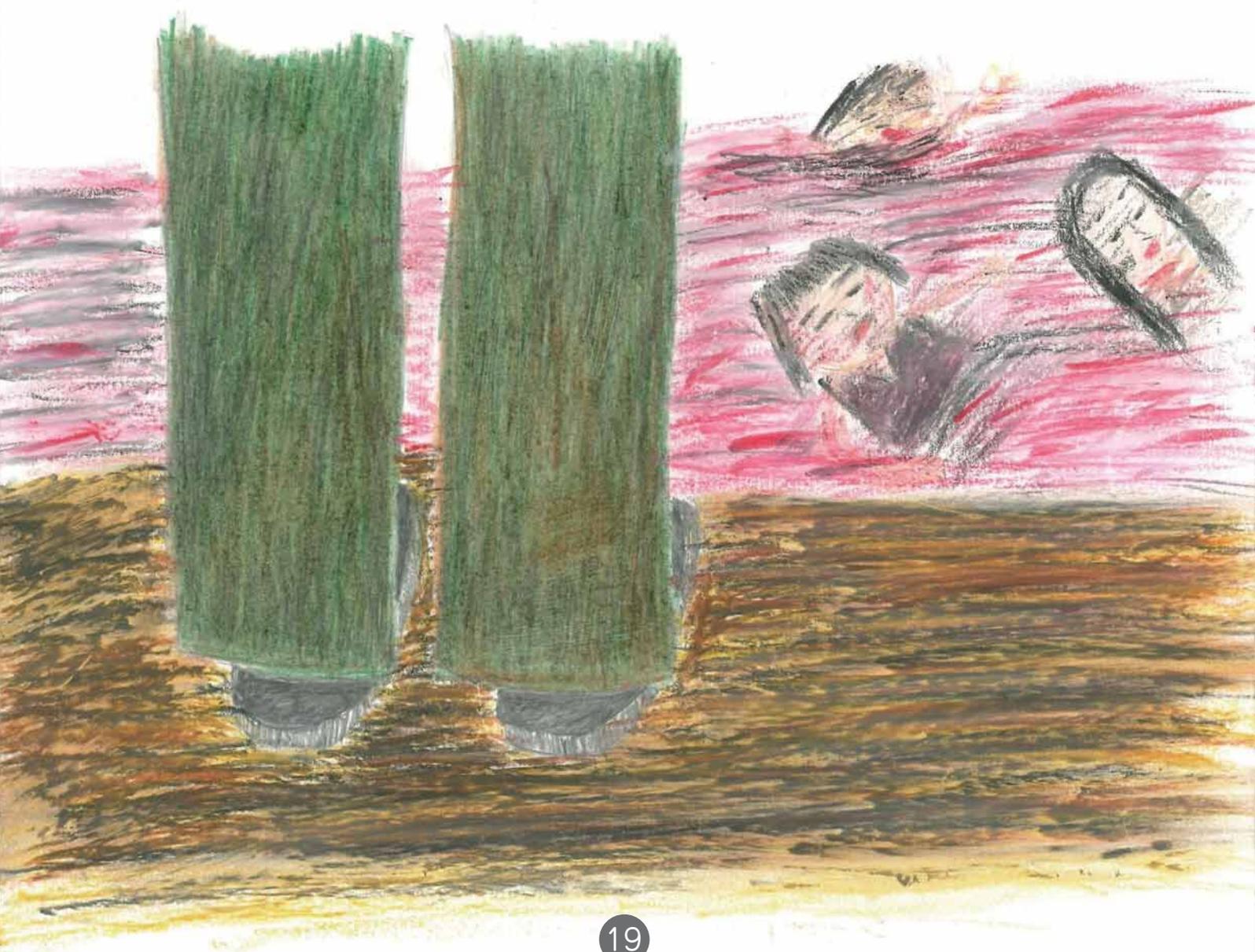
女^{おんな}か男^{おとこ}かわかりません。

生きて^いいるか、死^しんでいるかもわかりません。



熱^{ねつ}から逃^{のが}れようと池^{いけ}に飛^とび込^こんで

そのまま死^しぬ人^{ひと}もいました。



駅にたどり着いて、汽車に乗って故郷へ帰りました。



いえかえると家族は、わたしかおみおどろ
家に帰ると家族は、私の顔を見て驚きました。

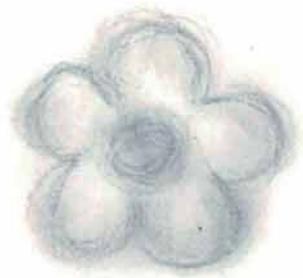
い
「生きとったんか！」



^{わたし}私はもう死んでいたと^{おも}思われていたのです。

この^{せんそう}戦争で生き残ったことが^{きせき}奇跡なんだと^{おも}思いました。

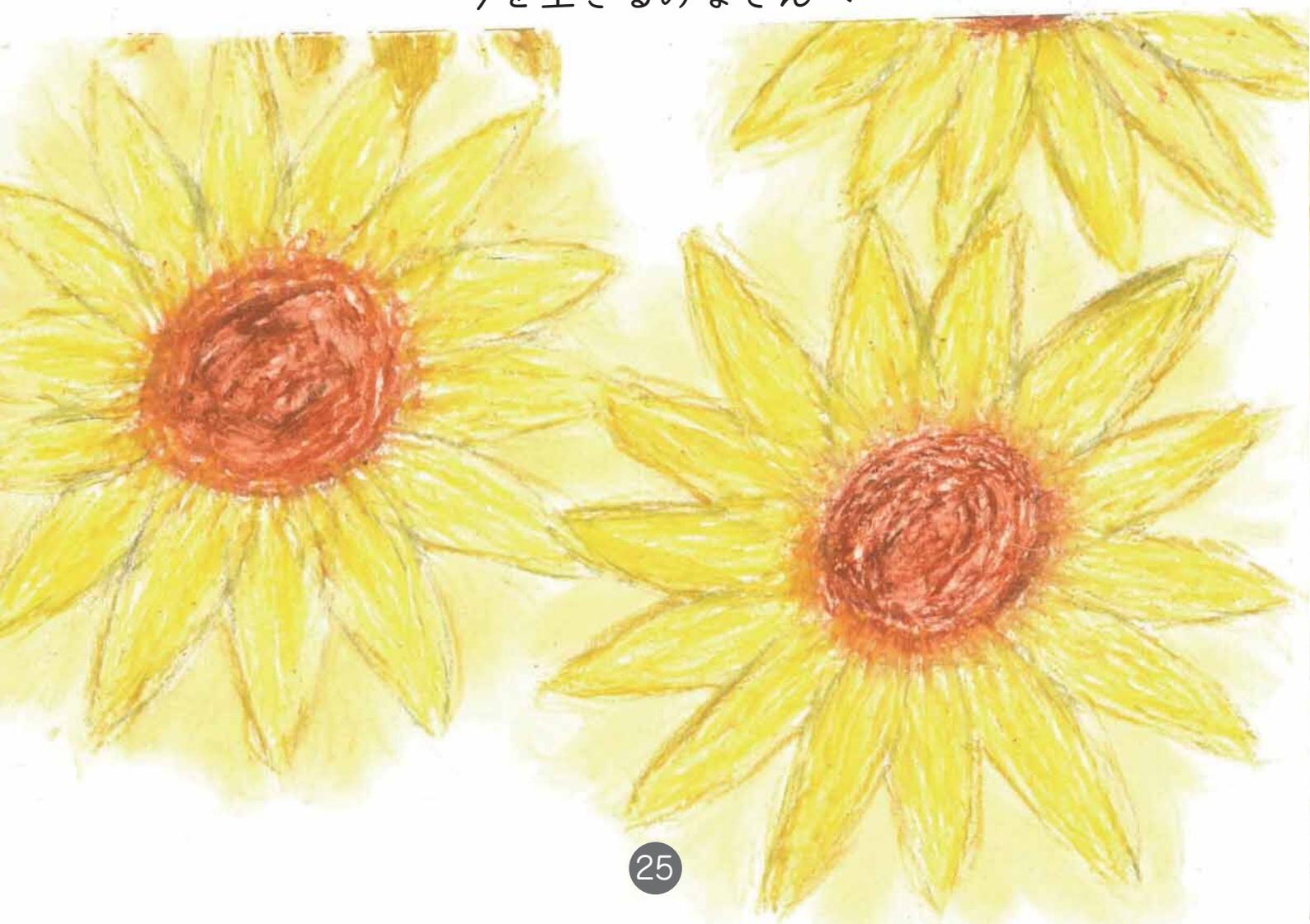








いま
今を生きるみなさんへ





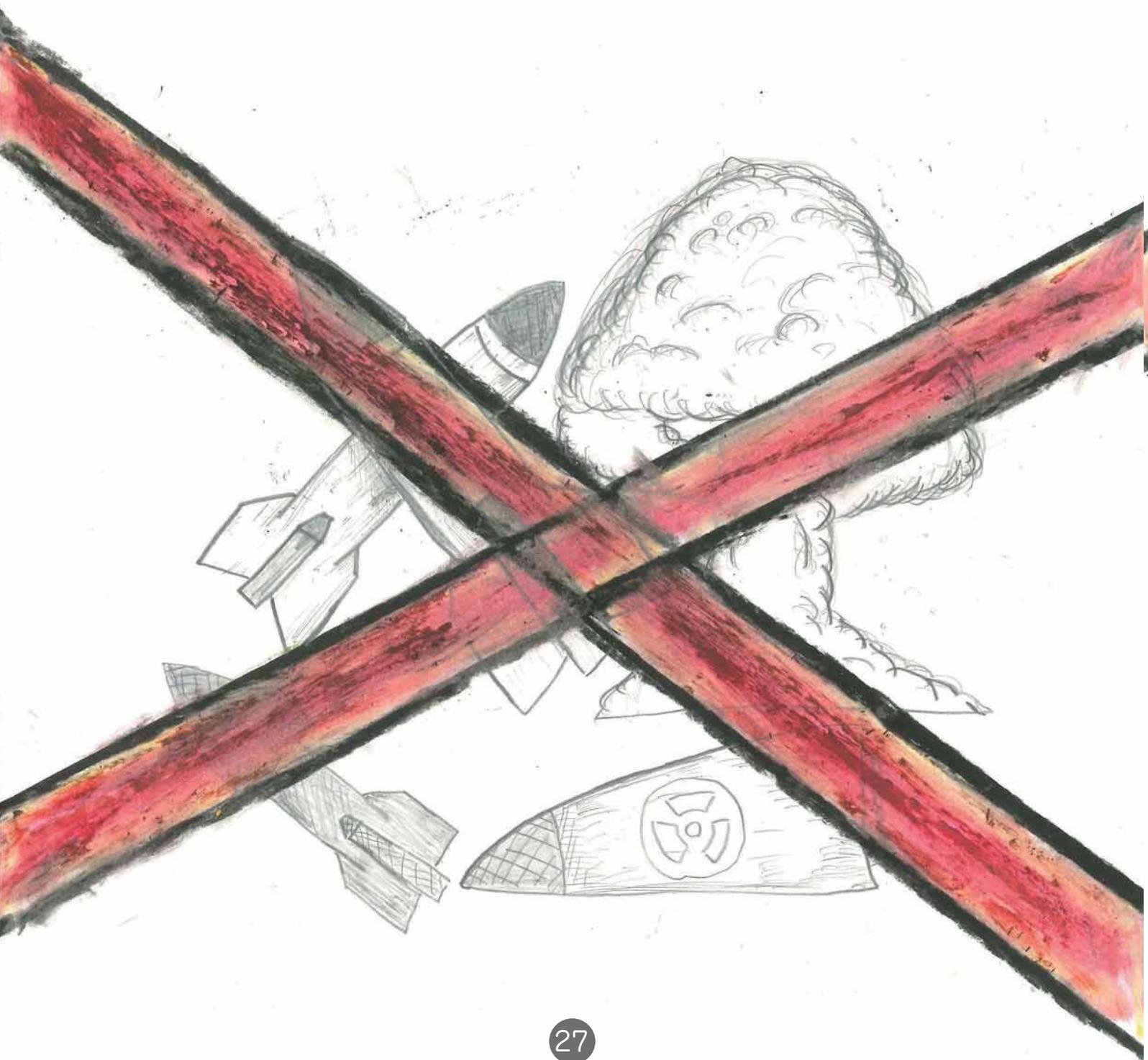
ひろしま
広島は、あの一瞬の爆弾で地獄に変わりました。

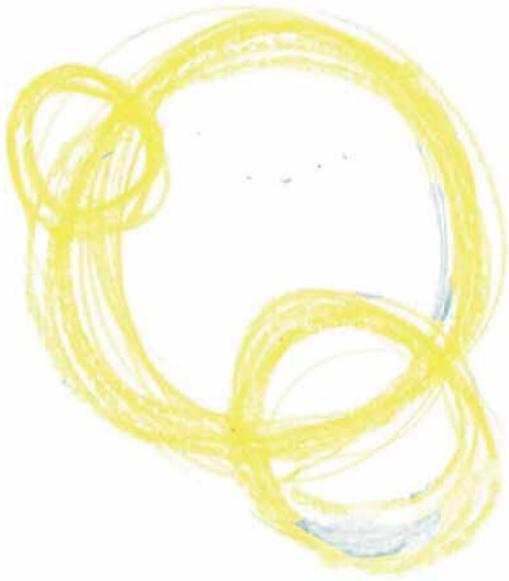
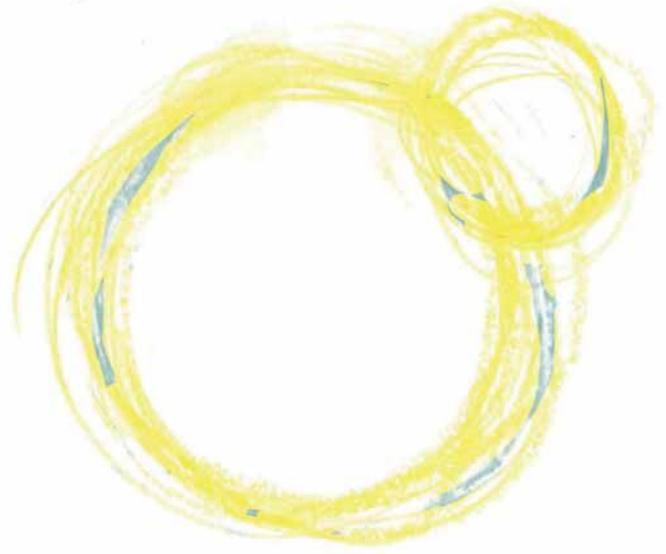
きせきてき いき のこ わたし さべつ いきづらい じだい
奇跡的に生き残った私にも差別や生きづらい時代がありました。



だから私^{わたし}は願^{ねが}います。

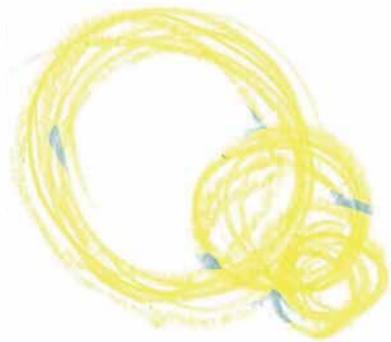
核^{かく}兵^{へい}器^きのな^い未^み来^{らい}を。





せんそう
戦争ではなく、

たが む あ へいわ せかい
互いに向き合う平和な世界を。



せんご ねん ふしめ
戦後80年の節目に、

あなたがこの現実と向き合い、

みらい つなが ねが
未来へ繋ぐことを願っています。



《 時をつなぐ私たちの思い 》

【富田林市立第二中学校 平和の絵本実行委員のみなさんに、思いを綴っていただきました】

☆ 阪本 莉良(実行委員長 絵リーダー)

平和の絵本をみんなで作っていく中でたくさんの学びがあり、本当に良い経験ができたなと思っています。戦争を実際に体験した藤野さんのお話を聞いて、絵本を作って、戦争は絶対にしてはいけないということや戦争の残酷さをより理解できました。

今の私たちの生活はとても平和で、感謝を忘れず、生きていきたいと感じました。二度と戦争が起こらず、平和な世の中が続いてほしいと心から思います。平和の絵本実行委員に参加できて、このようなとてもすてきな活動で実行委員長ができて本当に良かったです。とても楽しくて、とても貴重な経験になりました。

☆ 北野 雅空(副委員長)

今まで戦争の話は何度も聞いたことがあったけれど、実際に広島で被爆した話を聞いてもっと戦争の残酷さを感じたし、今の時代に生まれて良かったと思います。一番印象に残っているのは、戦争が終わった後でも被爆をしたことなどを理由に、たくさんの人から差別を受けてきたというところで、藤野さんはそんな中を今まで生きてきたということがすごいと思いました。今は戦争の話をしてくれる人がいるけれど、そんな人がいなくなっても戦争を繰り返さないように受け継がれていくことを願っています。絵本実行委員をして本当に良かったと思いました。

☆ 北野 詩歩(文章リーダー)

この絵本を作って、改めて平和の大切さや、今自分達が過ごしている環境がとても幸せなんだということに改めて気づくことができました。また、絵本を作るというめったにできない経験をすることができてとても楽しかったです。チーム前川のみんなと絵本を作ることができて良かったです。今回学んだ事を生かして、これからも平和の大切さについて知りたいと思いました。チーム前川、めっちゃ楽しかった。

☆ 掃部 湘真(学年リーダー)

僕は、2年学年代表、文章作りを担当しました。文章作りは本当に難しく、他の人はたくさん文章を考えていてすごいと思いました。でもしっかり文章を考えて書くことができて、他のメンバーとも絵本を作る時間を通して仲良くなることができました。絵本を作る時間はとても楽しくて、短い時間に思いました。今回で学んだ経験をこれからの生活に生かして、もっとより良いものにしていきたいと思っています。

☆ 細見 葉那

絵本を作って感じたことや考えたことは、戦争を実際に体験された方の話を基に作ってより深いところまで知ることができ、戦争がいかに辛く苦しいかを痛感しました。そのことを分かりやすく伝えるために工夫をし、一緒に考えたチーム前川のみんなと過した時間はやりがいがあり、毎日の生きがいで、大切な時間でした。

☆ 平松 杏梨

私は、友達に誘われて、絵本に入りました。その友達に感謝しています。なぜなら、平和という考えなければならぬ事を、絵本のみんなや前川先生と考えることができ、より仲も深まり、充実した日々でした。この絵本の活動を通して学んだことは、いつもなら文を考えたりして終わるところを、絵本は絵をかくので、さらに平和の尊さを実感しました。大変なこともあったけれど、絵本ができて幸せでした。戦後80年の記念すべき絵本を私たちに任せてくださり、ありがとうございました。最高の絵本を描けて良かったです。

☆ 山口 明日香

被爆者の方のお話をもとに絵を描く中で、戦時中の街の雰囲気はどうやって表せばいいのかわからず、難しかったけれど、暗めの色を使い、輪郭線を濃く描くことで暗めの雰囲気を表せるようにしたり、わかりやすく伝えるために使う色を減らし、表現したいものをメインに描くようにしました。絵を描いていく中で戦争の怖さや残酷さが伝わってきました。絵本を作って今まで考えたことのないようなことがたくさんあり、やって良かったなと思いました。

☆ 元山 萌ノ芽

文章制作で一番楽しかったことは、当時の様子を想像しながらみんなが書いた文章を見て、それに合った文を探すことです。

そこから見つかった文章を前後の文に合った文章にするために意見を出し合ったりすることも楽しかったです。

一番最後に文章と絵の構成では意見が分かれて話し合いになるぐらい、みんなが絵本に向ける熱量は高く、私自身、すごくいい思い出になりました。

☆ 2年生(匿名)

今まで社会、道徳、国語などたくさんの授業で原爆のことを聞いてきました。でも被爆者の方のお話を直接聞くことがなかったので、お話を聞いて戦争の無惨さ、恐ろしさを再認識しました。絵を描くにあたってどうすればこの話の内容がわかりやすくなるか、一目見ただけでどんな状況なのかかわかるかなどたくさんのことを考えました。この絵本を通じて戦争の無惨さ、恐ろしさを知ってもらい、再認識してもらうことで、これから未来を生きていく皆さんの人に「こんなことは二度とないようにしよう」という思いを忘れないでほしいと思いました。

☆ 浅野 凜咲(表紙 裏表紙担当)

私は表紙や裏表紙、1ページ目や最後のページなど大事なところを任せてもらえ、書きあげた時は、みんなに「すごい」と言ってもらえて嬉しかったです。

絵を描くうえで、被爆者の記憶によせられるように、色づかいや表情をできるだけリアルに再現できるように工夫しました。みんなで協力して1つの絵本を作り上げられたことにとっても達成感を感じます。この貴重な経験は、私たちにとって大人になっても忘れられないものになることを望みます。

☆ 吉田 彩珠(学年リーダー)

私は絵本実行委員を通して、戦争・原爆は本当にあったんだと改めて思いました。本当に起こったことだと分かっていたけれど、当時の恐怖は 80 年前のあの日を過ごした方々にしか分かりません。けれど、その当時を繋ぐのが絵本実行委員なんだと思いながら文章を全力で作りました。文章を作るときは自分から意見を出しました。とてもいい絵本ができたので、みんなに見てほしいです。そしてこの絵本を見て戦争の恐怖や悲惨さ、80 年の歴史を知り、絶対に戦争は繰り返したらダメなんだと言うことを心に置いてほしいです。

過去を忘れないために。

☆ 山口 美粋

始めは、絵だけを描こうと思っていたけれど、絵を描いているうちに、何だか大変だったんだ、とか、どのくらいしんどかったのかなと思って、絵を描いて、少し悲しくなりました。のどをいためた絵や、火傷の絵、苦しんでもがいている人の絵や、今にも死にそうな兵士の絵などを描いて、何だか心が痛くなりました。その他、戦争というのは、すごく悲しく、二度としてはいけない事だと思いました。戦争の絵を描いて、平和というものは、すごく大事で、戦争は繰り返してはいけないものだと、改めて感じました。

☆ 伊藤 陽莉

私は文章担当でしたが、絵も担当しました。

最初は、戦争とはしてはいけない、くり返してはいけないものと習ったけれど、なんとなくの知識しか無かったので、楽しそうだと思って誘いを了承しました。しかし、実際の話を書くにつれて、戦争の恐ろしさが身にしみ、後々後悔していきました。夏休みの課題で、話のメモなどを使って文章を作るという文章担当だけの課題の取り組みや、絵の表現の仕方が私なりに難しい点でした。時々弱音なども言ってしまいましたが、何かと言って楽しかったです。ありがとうございました。

☆ 鈴木 蓮夏

この平和の絵本実行委員をして、原爆の悲惨さをより深く知ることができました。授業では習わないことをたくさん知ることができました。自分は「この戦争で生き残ったことが奇跡なんだと思いました」という言葉が心に残りました。生きていることが珍しいことと今では考えられないことがあったことに驚きました。学校も今は普通に通えているけれど、この時代は行けなかったことや疎開などがあったと考えると、今は幸せだと思いました。戦後 80 年となって戦争の経験者の方々が少なくなってきたので、この絵本で語り継げると嬉しいです。

☆ 坂井 夏海

この絵本を作って、原爆は本当にこわいものだと思います。爆弾が落ちたその時だけじゃなくて、その後も痛みやつらさがずっと続くことを知って、とても悲しい気持ちになりました。今、自分たちがこのお話を読んで、忘れないことが、平和につながるんだと思います。もう二度と同じことが起きないようにしたいです。原爆のこわさと、平和の大切さがよく伝わる絵本を作ることができました。この事を忘れないことが、未来を守ることだと思いました。

☆ 布 青空

この絵本は、戦争の中で人々の気持ちや、平和の大切さを伝えているお話でした。特に心に残ったのは、爆発の場面です。その場面から、戦争によって普通の生活が簡単に失われてしまうことが分かり、悲しい気持ちになりました。私は、今自分が安心して学校に通い、家族や友達と過ごしていることは当たり前ではないと感じました。

この絵本を読んで、平和を守るために一人一人が思いやりを持つことが大切だと思いました。

☆ 前川 勝哉(顧問)

富田林市立第二中学校では、平和学習をはじめ人権学習を大切に取り組んでいます。

この平和の絵本は、戦後 80 年という節目の年に、「平和について考え、次の世代に伝えたい」という思いから生まれました。全校集会でこの活動への参加をよびかけたところ、16 人の生徒が集まり、「知りたい」「伝えたい」という気持ちを出発点に、この絵本づくりが始まりました。

はじめに、私たちは被爆者である藤野守さんのお話を聞きました。語られた一つ一つの言葉には、教科書や資料だけでは知ることのできない、当時の暮らし、家族や友人との何気ない日常、そして一瞬で奪われてしまった当たり前の時間がありました。子どもたちは、その言葉の重さを感じ取り、メモを取りながら、静かに、真剣な表情で耳を傾けていました。

話を聞いたあと、

「この出来事を、どうすれば絵本で伝えられるだろう」

「この言葉は、変えずにそのまま残したい」

「この場面は、文章ではなく、絵で伝えたい」

そんな問いや迷いが、話し合いの中で何度も交わされました。絵本づくりは、決して簡単な作業ではありませんでした。一つの表現を決めるために何度も立ち止まり、意見が分かれることもありました。それでも子どもたちは、「自分の考えを通すこと」よりも、「読む人にどう伝わるか」を大切にしながら、互いの意見に耳を傾け、考え続けました。どの言葉を選ぶか、どこまで書くか、どんな色や構図がふさわしいのか。一つ一つの決断の背景には、「この出来事を軽く扱ってはいけない」「本当のことを、誠実に伝えたい」という子どもたちの強い思いがありました。

約半年間、16 人全員が同じ一冊と向き合い続けた時間は、その過程そのものが、子どもたちにとってかけがえのない学びの時間となりました。この活動を通して、子どもたちは「平和とは何か」「なぜ語り継ぐことが大切なのか」を、自分自身の言葉で考えるようになっていきました。答えがすぐに見つかる問いではありません。それでも、考え続けること、知ろうとすること、伝えようとする事自体が、平和への大切な一歩なのだ、私たちは学びました。この絵本に描かれているのは、過去の出来事です。けれども、それを「今」を生きる子どもたちが受け止め、考え、表現したことに大きな意味があります。戦争を知らない世代が、想像し、悩み、考え抜いた思いが、この一冊に込められています。一人では決して完成しなかったこの絵本は、子どもたち一人一人の思いが重なり合い、少しずつ形になっていきました。互いの考えを尊重し、意見を交わしながら一つの表現をつくり上げた経験は、子どもたちにとって忘れることのできない時間となったはずです。この絵本を手にとったあなたが、子どもたちの思いに触れ、誰かと話したくなったり、少し立ち止まって考えたりするきっかけになれば幸いです。そして、その対話が、子どもたちの願いとともに、未来の平和へとつながっていくことを、私たちは心から願っています。

思いをつなぐ

～ 忘れてはいけない、あの日のこと ～

令和8年3月発行

《被爆体験者》

ふじの まもる
藤野 守

(堺原爆被害者の会)

《絵・文章・総括》

富田林市立第二中学校

平和の絵本実行委員会のみなさん

【絵】阪本 莉良 / 北野 雅空 / 山口 明日香 / 2年生 (匿名)

浅野 凜咲 / 山口美粋 / 鈴木 蓮夏 / 坂井 夏海

【文章】北野 詩歩 / 掃部 湘真 / 平松 杏梨 / 細見 栞那

元山 萌ノ芽 / 吉田 彩珠 / 伊藤 陽莉 / 布 青空

【総括】前川 勝哉 (顧問)

《編集・発行》

富田林市 市民人権部 人権・市民協働課

〒584-8511 富田林市常盤町1-1

0721-25-1000(代)

※この絵本は、被爆体験者が当時の記憶に基づいて語った内容を
子どもたちが情景としてイメージしたものです。

